芹沢光治良

# こころの波

新潮社版

# こころの波

芹沢光治良

新潮社

こころの波

著　者・芹沢光治良
発行者・佐藤亮一
発行所・新潮社
郵便番号 162
東京都新宿区矢来町71
振替東京 4—808番

定価・980円

昭和57年10月10日　印刷
昭和57年10月15日　発行

©Kojiro Serizawa 1982　Printed in Japan
印刷所・東洋印刷株式会社　製本所・植木製本株式会社

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

こころの波／目次

I
牡丹と記念切手　9
文学の胞子　15
童　女　19
思いがけない場所で　26
アメリカと信じてブラジルへ移住した村の人々　32

II
私はソ連でデカンショを唄った　41
親孝行について　48
「椿姫」に嗚咽(おえつ)した民衆　55

III
梅雨の頃をスイスで過したい　65
レマン湖畔の夏　71

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人生の秋　77

Ⅳ

老齢か　85

喪服を着た貴婦人　90

C伯爵夫人はどうしているか　97

ノーベル賞候補者夫人　104

春の来ない冬と春の来る冬　113

Ⅴ

この期に及んで五千枚の原稿用紙を作らせるとは　123

飛行機について　129

ミケランジェロと語った日　136

新年は私にはないが　142

静かな人生のたそがれ　148
この冬に向って、三通のよろこばしい知らせ　154

VI

年の瀬　163
死んだはずの若い日の友が生きていた　167
美しい朴の一葉がまた散った　173
孤独な老耄欅　179
ローマ法王のメダル　186
私も「ガン病棟より還」らなければ　193
最後の「ひろば」に　200

VII

或る女流詩人への手紙　209

# こころの波

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 牡丹と記念切手

あの年（昭和四十四年）は三月になってから大雪にみまわれたりして、寒さが身にこたえて、冬が長く感じられてならなかった。

お彼岸がすぎて、突然に暖かな日が二日つづき、二階の書斎の窓にも花の香がして、久しぶりに庭へ降りた。沈丁花が香をはなっていたが、四本のうち二本の古木が、蕾も葉も雪に凍てたのか、しおれていた。その一本は白沈丁花なので、惜しかった。沈丁花は年をとると弱くなるから、跡継ぎを用意すると言って、二年前に庭師がその白沈丁花の一枝を、さし木したことを思い出して、裏庭の方に出てみた。二十センチもないさし木であるが、白い花をつけていた。

この老庭師は四十年近くわが家に出入りしていたが、その冬は足腰がきかなくなったからとて、例年のように寒肥にも雪掻きにも来れなかった。「暖かになったら、お宅の庭の手入れだけはするから」と、頑固なことを言ったが、年老いて果して来れるか、不安だった。なじんだ庭師が来ないからとて、すぐに新しい庭師に頼む気にならないので、わが家の庭は荒れたままだった。

荒れた花壇の端に、水仙の群れが目を覚したように黄色な花をもたげていた。春を告げる水仙も、年々花の数がへる。排気ガスの影響であろう、紅梅の老樹も、二年つづけて花をつけなかった。水仙のそばの花壇に、牡丹が三株、紅に若芽をふきあげていたが、その年はどんな花を咲か

せるか、心もとなかった。
その牡丹は三株ともA君のお父さんから贈られたものであった。
A君はあの年の春T大学を卒業する予定であったが、大学騒動のために、留年になったのではないだろうか。入学した年の冬休みに、新潟に帰省して、東京へ帰る時に、お父さんから一株の牡丹と自家製の伸し餅とを、託されたと言って、私を訪ねて来た。A君にもその時初めて会ったのだが、私はそのお父さんを識らなかったから、とまどった。なんでも、若い頃から私の読者で、A君が中学生になるとすぐ、私の作品を読むようにすすめたほどで、A君の家では常に私を話題にしているとのことだった。
雪国に住みながら、お父さんは牡丹が好きで、牡丹園をもち、新種をつくることをたのしみにしているが、自慢の新種一株を、私の庭に移して、私の目をたのしませたいとて、親切にもA君に運ばせたのだった。A君はまた気軽に、
「シャベルはありませんか……こちらへ植えていいですか」と、東側の花壇に牡丹を植えると、さっさと引きあげて行った。
その数年私はものぐさになっていて、庭のことも一切庭師委せだったが、ただ牡丹は花のいのちが短いから、花壇には牡丹よりも四季咲きの薔薇を選ばせた手前、A君の牡丹には多少当惑したが、見知らぬ人の厚意を大切にすることにした。その牡丹は五月末に豪華な花を咲かせたので、A君にも知らせて招いたが、おいでがなく、どんな点が新種か、きけなかった。A君が次に訪ねて来たのは、翌年の正月の休暇過ぎで、今度もまた、お父さんから託されたと言って、新種の牡丹を一株持ってきて、前年の牡丹の隣に自ら植えた。
「数日下宿においてたけれど、大丈夫根づくと思います。僕は父のように牡丹も文学も好きでな

いものですから、うっかり下宿で濡縁の隅においたまま忘れていました――」

A君は頭をかきながら、そんなことを言って、引きとめたが、すぐにもどって行った。法律を勉強するという若者には、年とった文学者が気詰りだというような様子であった。その年の春も牡丹はもちろん二株ともみごとに花を開いたが、A君は花見に誘ったけれどやはり現れなかった。そして、翌年の正月すぎに、三度、A君は三株目の牡丹を、私の庭に植えに来た。

「君は牡丹を植えるばかりで、花を見に来ないが、今年は是非来て、説明してくれないか」と、私は頼んでみた。

「来年の今頃、四株目を植えれば、この花壇は満員ですね。これでよかった。来年は僕も卒業ですから、再来年はもう植えに来れません」

「そう、来年は卒業か、卒業式にはお父さんも上京なさるだろう？　是非ご案内してくれないか、牡丹も見てもらいたいし、お礼もじかに申し上げたいから……花には早いだろうけれど」

「父は芽の吹きあげ方を見ただけで、花の咲き具合がわかりますから、花の季節でなくても……先生にお会いするだけでも喜びます」

そんな言葉を残して、急いで帰って行った。そして、その翌年の正月休み後、四株目を持って訪ねるA君を心待ちにしたが、なかなか現れなかった。二月のはじめに電話をかけてきて、せきこんで言った。

「先生、学校騒動で正月休みに帰省しなかったもので、今年はお約束の牡丹を植えに参れませんで……それでお願いですけれど、家でテレビなどを見て、心配していますが、きっと父が先生にお願いに行くでしょうが、安心するように話して下さい」

「安心するようにって……君が話して安心させられないのかね……学校騒動で、君はどんな役を

演じているの」
「先生にはわかっていただけると思うけれど。お話しなくても、僕等のしていることが……だから、父に話して、安心させて欲しいんです」
「ね、一度来て、僕に聞かせてくれないか、君達の闘争の本質を……僕には母校だからね」
「何れうかがいます。だけど、父のことは頼みますよ、先生の話なら、父は信じて安心しますから」と言うなり、電話がきれた。
しかし、A君が心配していたように、お父さんは訪ねても来なかったし、手紙もくれなかった。もちろんA君は訪ねて来なかったが、三月の二度目の大雪の翌日、また電話をかけて来た。
「先生、闘争も終りに来ました。今度は必ず伺います。卒業は牡丹の花の頃になるでしょうから、父といっしょに参ります……闘争中に、はじめて先生の大長篇を読みました。だから、ゆっくり伺えます」
こちらの言葉も待たないで、今度もすぐ電話がきれた。それまでA君が牡丹を植えに来ても急ぎ帰ったのは、私の小説を読んでないからだったと想像された。ともかく、A君が大学紛争にも拘らず、牡丹の花の季節に卒業できるのだと知って私は吻としたが……
読者とは不思議なものだ。私はA君のお父さんには、まだ面識もなく、牡丹を贈られてから、数回手紙の往復があったのに過ぎないが、心のかようものがあって、A君の卒業を本心喜ぶ気持になるのだった。しかし、そのお父さんが牡丹の花の季節に来られて、花を見て喜ばれるか。牡丹は年ごとに、精気をなくして、花も小さくなって豪華さを失って行くようなので、私はそれが心配だった。丹精をこめられた新株が、排気ガスの多い東京の土地になじまなかったものと認めてくれればいいが——私は三株の牡丹の新芽を注視したが、三月の二回の雪でいためつけられて

いるような気がしたからだった。

その牡丹から、私はその朝受けとった美しい記念切手のことを思った。これも読者だという畳職の青年から贈られたものだ。

その十日ばかり前に、福知山市にいる読者だという青年から、一通の手紙が届いた。中学校を卒業するとすぐ、畳屋である父親のすすめで、福知山市の畳屋の処へ修業に来て、三年近くなって一人前の腕をもつ職人であると書いていた。一年ばかり前から、親方から許されて、町の図書館に毎晩行き、読書しながら勉強しているが、ここで係りの人に、私の「人間の運命」という小説を読むようにすすめられて、四回も読み返したと書いていた。最近、土地の新聞の「時の人」に、私の写真と記事が出ているのを見て、芹沢（せりざわ）と読むということと、住所とをはじめて知って、手紙で頼んだらば、教えてもらえると思って、決心がついたとも、書いていた。

若い自分が畳職人になることが、ほんとうにいいことか、もっと社会に役立つ仕事が他にありはしないか、あればまだ若いから、今のうちに替りたいが、教えて欲しいというのであった。父親は京都市外の畳屋で、もう一年修業したらば、家へ帰って父の仕事を手伝うのだが、経済的にはどのくらいになると、こまごま書いてあった。そして、私に教えてもらうために、自分の最も大切にしているものを贈るとて、さまざまな美しい記念切手を何枚も封入してあった。

私はふだん読者に返事を出さないことにしているが、この素朴な青年には、励ましの言葉を送らずにはいられなかった。畳職も立派に社会に役立つ仕事であるから、疑うことなく、日本一の畳職人になる決意で、はげむように——と、私が小学校の代用教員をしていた時の教え子で、八百屋や大工になった人々が、日本一の大工や八百屋になろうという心掛けで努力した例などをも書き加えた。同時に、私は畳職が好きになれないのかと質問したが、その手紙に、記念切手をみ

な入れて送り返した。

それに対して、今朝、青年から手紙が届いたが、また記念切手がみな封入してあった。畳職は嫌いではないが、日本の家屋に畳が不要になるようなことはないだろうか、心配だから教えて欲しいと書いてあった。記念切手は返事の封筒にはってくれれば、自分にもどって来て、宝になるから、私の手もとにおいて、自分のために使って欲しい、私を先生として、将来次々に教えてもらうからと、ほほえましいことを書いてあった。

五十年や百年は、京都の日本家屋で畳が不要になることはなかろうが、かりに不要になるような日があっても、京都の国宝のような多くの寺院には、畳は永久に必要であるから、国宝の畳を引き受けるぞという意気込みで、畳職にはげむようにと、私は返事を書いて、記念切手のなかから金閣寺の切手を選んではって、投函させたばかりだ。

京都府の福知山という町は知らないが、そこに愛すべき素朴な青年がいると思うと、心が和むが、同時にまた、心重くなるのはどういうわけであろうか。読者であるからだろうか——

（後記——読者といえば「文学の胞子」と題して、次のようなことを新聞に書いたことがある）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com